正休寺だより

第8号
2020年5月1日発行
青森県北津軽郡板柳町
大字板柳字土井241
TEL.0172－73－2016

横浜町の菜の花畑

発行に当たって

正休寺住職　高澤　暢男

さて、この度『正休寺だより』を十年ぶりに発行することとなりました。これは、「新型コロナウイルス」の感染拡大によって、お寺や地域の諸行事が次々と中止に追い込まれる中、皆様に少しでもお寺からの情報をお届けしたいと願って発行するものです。

お寺では、二月二十八日の初御講は、毎年様々なイベントを企画し皆様に喜んでいただいています。今年は「お寺で楽しむクラシック音楽」を企画し、その準備を進めていました。しかし残念ながら、各種イベント等の自粛要請を受け、直前での中止を決定いたしました。また、三月九日から十一日まで二泊三日の日程で予定していた、京都での「正休寺総代会研修」を中止し、さらには、三月二十六日～二十八日の永代経法要を延期いたしました。

なお、毎月の「御講」並びに「正休寺同朋の会」などは、当面の間中止といたしますが、再開できる目途がつき次第改めて皆様へご案内申し上げます。

いま、イベントの自粛、さらには外出の自粛が要請され、見えない「ウイルス」から、自分や大切な人を護ろうとする行為によって、一部では新たな差別・排除が生まれつつあります。いま改めて人と人との「繋がり」「共存」「絆」が私たちに求められているのではないでしょうか。

法事をどうつとめたらいいの？

今日のこの状況の中、「法事をどうつとめたらいいの？」「お客様をご案内していいの？」、はたまた「ご葬儀の時はどうする？」と迷っている方がたくさんいらっしゃると思います。

今、お寺での法事は、本堂入り口でまず手の消毒。そしてお参りは間隔を空けて座っていただいています。読経の際、皆さんとは適当な距離がありますので、発声しづらい事もあり、マスクは外しております。

これまでは、ご法事の後「茶の間」でお茶を飲みながらのお話しをさせて頂いていましたが、当面は控えさせて頂きます。

ご葬儀に関しては、この状況下の中で規模を縮小せざるを得ないこともあろうと思いますが、精一杯のお見送りをさせて頂きたいものです。

なお、皆さんにおきましては、マスク着用でのお参りをお願いいたします。とは言ってもマスクの入手が困難です。出来る限りの予防をしてお参り下さい。

ご相談、また気になる事がございましたら、お気軽にお電話下さい。

お庫裏からのつぶやき

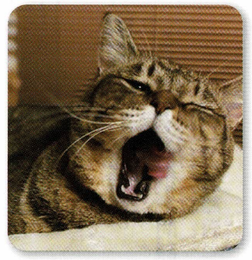
前回、飼い猫モモの様子をお伝えしてから十年。特に具合が悪くなるわけでもなく穏やかに過ごしてきましたが、歳を重ねるとやはり動きは少し違ってきました。

以前は、流し台や洗面台に飛び乗って、蛇口から流れる水を飲むのが好きでした。今は飛び乗ることはなく、器に汲んだそれもお湯を好んで飲みます。

近くの猫が遊びに来ると、尻尾を太く立て体を大きくして威嚇していましたが、今は「お好きにどうぞ」という感じ。

境内では、草陰から草陰へ忍者のように走り回っていたのに、今はひなたぼっこが気持ちよさそうです。

私たちが出先から帰ると、玄関先で待っていて、お帰りの「にゃー」を言ってくれていましたが、今では私たちがモモの側に行き、「ただいま」の報告。何だかなぁ。だけど、疲れたなって時も、イライラするって思う時も、モモを見ると自然に顔がほころんでいる。



マイペースなモモ

猫は、生後一年で人間の年齢で言えば二十歳程度に値し、その後は一年ごとに四歳ずつ歳をとると考えればいいそうです。つまりモモは、十年前は二十六歳、今は六十四歳ぐらいになる。おぉっと、いつのまにか私の先輩。毎日気ままに過ごしているようで、慌ただしく歳をとってきたのですね。本人（モモ）は、たぶん痛切に衰えを感じている事でしょう。

私事、四月で一つ歳をとりました。年齢を勘違いしているとお嫁さんに教えられ、関心が薄れてきているのか、歳をとる事を否定したいのか、どちらにしてもこんな自分に驚きました。

あの頃はこうじゃなかったのに、と後ろを振り返ると、これからこの先どう変化していくのか、前を向くのが恐ろしくなります。

でも、今だから出来ることもあるはず。走り回って落ち着きがなかった頃のモモとは違い、遊びもお散歩も長続きせず、すぐにゴロンと寝転がってしまうモモだから笑ってしまうんです。一息つかせてくれるんです。

私たちもそう。衰えばかりが目につきますが、今になったから気付ける事素直にうなずける事、そして出来る役割があるように思います。顔や手のしわはその人の年輪。不具合が出てきた体も、永年お世話になった相棒。「ありがとう。もう少しよろしくね」と仲良く付き合っていきたいものです。

皆さん、毎日いかがお過ごしですか

（坊守）

関東二十四輩めぐり

◇親鸞聖人直弟子の招寺◇

親鸞聖人が越後への流罪が許された後、関東での教化活動をされます。その時の直弟子によって建立されたお寺を「関東二十四輩」と言います。

今回は、茨城県常陸大宮鷲子にある照願寺を尋ねます。ここは、正休寺の本家寺で、開基は地元の豪族であった、高澤城の城主高澤氏信と言いました。

寺伝によれば、氏信は観世音菩薩の霊告を受け、稲田（現在の茨城県笠間市）に滞在していた親鸞聖人を尋ねて弟子となり、「念信」という法名を賜わり、その後に草庵を開いたと伝えられています。

また、茨城県の『美和村史』には「照願寺に安置されている本尊（阿弥陀如来立像）は、鎌倉時代後期から南北朝時代のものと考えられ、有力な保護者の存在と経済力の旺盛さを思わせる」と記されており、念信の教化が広まり照願寺の隆盛をもたらしたことがうかがわれます。【写真】は県道から山門につながる参道で、右にある桜の古木は「見返りの桜」と言い、聖人が訪れた時、一夜にして満開になり、他力念仏の教えが繁盛する奇瑞であろうと、何度も振り返りながら念仏したと伝えられています。

また、照願寺の山門前に臨む小高い山には、高澤城跡があり、山頂や尾根に空堀の遺構が発見されています。念信は、僧侶と武士（城主）の二面性をもっていたのでありましょう。

なお、その照願寺初代の念信の二男＝高澤義氏（１２１８年～１２６７年）が正休寺住職の高澤家の初代となります。義氏は、二十六歳の時、父氏信と同じく観音の夢告を受け京都五条西洞院におられた親鸞聖人を尋ねて教えを受け、弟子となり、法名「順信」を賜わり、帰国後に一宇を建立したと伝えられています。

その後、お供十数人と共に一五五七年、現在の浪岡に移り、さらに弘前の堀越→新寺町、そして板柳に移り、正休寺を建立したのでした。

現在、正休寺では、一八三二年に照願寺より、親戚寺院のよしみによって、本願寺第十代顕如上人の「十字名号」を頂戴し寺宝としています。

副住職が仏前で結婚式

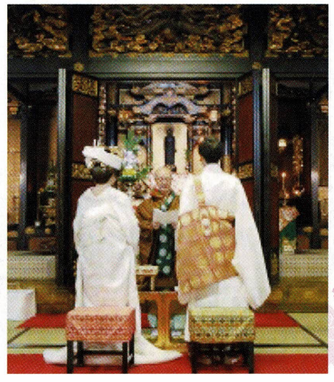
―若坊守と共に今後のご指導を―

さる一月十八日、新郎髙澤正弥（二十七歳　正休寺副住職）と新婦鳴海有沙（つがる市）が、正休寺本堂において仏前結婚式をあげました。

当日は、髙澤家・鳴海家の両家親族並びに正休寺正副総代長出席のもと、正教寺住職（むつ市）の竹園関師に司婚をしていただき、厳かな中に華燭の儀が勤まりました。

なお、ご門徒の皆さまへの披露については、後日改めて関係諸氏とのご相談のうえと思っております。

まだまだ未熟な二人ではありますが何卒ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



若坊守さん　ガンバってますヨ！

お寺のお仕事を始めてからあっという間に三ヵ月が経ちました。こんな私にお寺の仕事が務まるのだろうか？不安でいっぱいでした。

緊張しながら門徒さんとお話しをしたり、苦手なパソコンと向き合って苦戦したり、法事のご案内を出したり、毎日過ごしていく中で、やりがいや楽しさを感じ、何でも挑戦してみようという気持ちが強くなりました。

二月から始めたお花のお稽古。やります！と言ったものの、お花の知識はゼロ・・。お花の名前もハサミの持ち方も分からず、最初はただただ先生のお手本を見ているだけでした。

回数を重ねるうちに「今日はお直しいらないね！」と褒めていただける日もあり、次も頑張ろうとお花が好きになりました。

九回目で「自由花」から「生花」にステップアップ！お寺の玄関や廊下に飾っていますので是非見てくださいね。

まだまだ至らない点も多々あるかと思いますが、これから一生懸命がんばりますのでよろしくお願いいたします。

（有沙）

【お念珠について】

私達真宗門徒において、お念珠（数珠）はとても身近な存在であり大切なものです。仏様の前で手を合わせ、お念仏申す時も必ずお念珠を持ちます。お勤めをする時もそうです。お念珠に始まりお念珠で終わるのです。

それでは真宗におけるお念珠とはどういう意味があるのでしょうか。

お念珠の珠（たま）の数は一〇八つが基本で、煩悩の数を表わします。皆さんが今使われているものは、その半分の数であったり、珠の数を減らした略式のものが用いられています。

そして一〇八つの煩悩は、私たちを煩わせ、大変に悩ませるものです。特に「貪欲、瞋恚、愚痴」を三毒の煩悩と言います。生きている限り欲の心、怒りの心、人を妬（ねた）んだりする気持ちは無くなることはありません。むしろ燃えさかる一方です。

そんな煩悩に翻弄されている私達に、親鸞聖人はお念仏の教えを説いてくださいました。聖人自身沸き起こる煩悩に苦しみ、比叡山で二十年の間修行を積みましたが、煩悩を断ち切ることができなかったのです。そのような中、法然上人と出遇い、お念仏の教えをいただいたのです。「煩悩あるがまま救うぞ」という阿弥陀様の本願によって聖人は救われたのです。

腹が立つのも、うらやむ気持ちが起こるのも当たり前の事です。私はそんな心はない、何てことにはなりません。何故なら、それらを隠そうとする心も煩悩なのです。つくづく自分ではどうする事も出来無いなと考えさせられます。そこに聖人の教えを聴いて欲しいのです。お念珠を持ちお念仏申すことが大切なのです。

お念珠の意味を問う事の中で、煩悩に振り回されている自分自身の姿が見えてくるのではないでしょうか。

（副住職）

住職一口法話

「自己とは　何ぞや　これ、人生の根本問題なり」

（清澤満之の言葉）

今、私において一番大切なものは何かと問われれば、例えば病気の人であれば「健康」と答えるでありましょう。しかし「本当に健康があなたにとって一番大切ですか」と問われると、そこからが意外と厄介なのです。

何故なら、「健康」は実は入れ物であって、その健康で何をするのか、何がしたいのか、という事がすぐに課題となるからです。「長生きしたい」という思いも同じです。長生きをして何がしたいのか？ここに「手段」が「目的」になってしまう誤りがあります。

つまり、生きるという事は具体的な状況を生きているという事なのですが、その状況を縁（条件）として、何を実現していかねばならないか、このことをハッキリさせることこそが、生きる事の根本問題と気づいたのが清澤満之だったのです。

様々な状況に対応していくことに二種類の姿勢があると清沢満之は教えています。それは、

①今の状況を何とかしたいという姿勢であり、

②その状況が私に何を要求しているのかと問う姿勢

の二種類です。さらに①の「状況を何とかしなければ」のもつ圧倒的重みの前に、多くの人々は②の「状況が私に何を要求しているのか」がすっかり背後に押しやられ、そのことへ思いが至らなくなると指摘しています。

「新型コロナウイルス」感染拡大の状況下の中、改めて「この状況が私に何を要求しているのかと問う姿勢」を持ちたいものであります。

デカルトの「我思う、故に我あり」は有名な言葉ですが、山極寿一氏（京都大学総長）は、そうではなく、「我感ずる、故に我あり」ということが大事だと教えています。言葉としては「思う」と「感ずる」の違いですが、そこでは、「頭で考える」のではなく、五感を通じてこの環境をどう受け止めるか、さらに、その中に生きている自分をどのように受け止めるのかが大事であると教えておられるのです。

私たちは情報に振り回されながら生きています。その情報は言葉です。言葉だけで理解しようとすれば体が置き去りにされます。山極氏は「了解（本当に頷く）とは、理解によって持たされるものではない。直観によってもたされ、身体感覚が非常に重要です。」と言われています。

今日、私たちは仏教の教えも頭で理解しようとしています。しかし真実の法は、私たちの考えの及ぶものでも、言葉で表現することもできないものです。そのことを「ただ念仏申すべし」と親鸞聖人は教えてくださいました。念仏申すとは、ただ座り込んで南無阿弥陀仏を称えるのでない。自分に与えられている責任を担い、全うしていく歩みを始めるという事なのです。

そのことを、清澤満之氏は「人生の根本問題なり」と教えられました。健康であり長生きをするとは「生きる喜びと生まれた意義」を見い出していく歩みに外なりません。

（住職）

【清澤満之】

一八六三年、名古屋生まれ。東京大学・大学院で宗教哲学を学ぶ。大谷大学初代学長。四十歳で逝去。

心に響く言葉

人間一生
　酒一升
あるかと思えば　もう空か

耐えてきた
　そういう妻に　耐えてきた

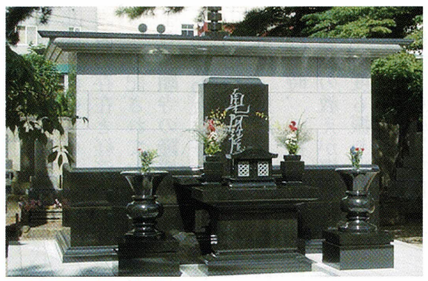
人は　無いものを　ねだるが
　あるものの価値に　気付かない

死ぬことは　不幸ではない
　不幸な死に方が　あるだけ

親の言うように　子供は育たない
　親のやるように　子供は育つ

永代供養墓「共命苑」

お墓の後継者でお悩みの方は、ご相談ください。生前にお申し込みもできます。（冥加金　五月一日現在）



正休寺永代供養墓の写真

特別安置型納骨	冥加金50万円
一般安置型納骨	冥加金30万円
合葬型納骨	冥加金20万円